

しまづくりサミット2024開催

Fujiico

—教育による島づくりについて議論

令和六年十一月一日（金）、東京・池袋のサンシャインシティ文化会館にて「しまづくりサミット2024（公益財団法人日本離島センター主催）」が開催された。今回は「学びの島による離島創生」離島留学とアイランドー高校生サミットの事例から「をテーマに、島の資源を活かした教育の実践や郷土愛の醸成による離島の創生について、事例報告やフロアディスカッションなどが行なわれた。

サミットには、離島留学を実施している島根県知夫村^{ちぶ}および鹿児島県三島村の両教育長、アイランドー高校生サミット（以下、高校生サミット。詳細は後述）の実行委員を務める大学生・高校生などが登壇。約八〇人が参加した。

三島村は「日本の保健室」

室^{むろ}之^の園^{あまのり}晃^{あき}徳^{のり}（鹿児島県三島村教育長）

竹島、硫黄島、黒島の有人三島から成る三島村。全島合わせて人口三四二人（令和六年十一月一日現在）の村では、一九九七年より村内の小中学校に通う児童生徒を島外から受け入れる「しおかせ留学（離島留学）」が行なわれている。

鹿児島からの定期船が週に四本の運航と、本土側と毎日行き来できない小さな島々への移住は難易度が高いが、離島留学であれば期間も限られており、子どもにも地域にもメリツトが大きい。事業の開始から現在までに東京や横浜、九州を中心に延べ五〇〇人以上の留学生の受け入れ実績があるという。

室之園教育長は「三島村を日本の『保健室』と見立てて、離島留学に取り組んでいる」と話す。「全国に約三四、六万人の不登校（※1）、約一四六万人の引きこもり（※2）がいる中で、村全体を『保健室』と見立てて子どもたちを受け入れ、それを介することで彼らが生きる力を養い学校に登校できるようになる。実際に留学生の中には、ゲーム依存症や昼夜逆転の子、運動不足による食欲不振の子もいた。しかし、一人一人の生徒を先生がじっくりと見ることができると小規模学校のメリット、小さなコミュニティで多様な人々と密に関わることでできる島の生活、自然と共存する暮らしなどが功を成し、登校できるようになった」と、室之園教育長は説明、日本の教育課題の解決にもつながると強調する。



室之園晃徳鹿児島県三島村教育長。

常に高い。子どもの増加は、学校の存続はもちろん、地域の活性化にもつながっている。例えば、村にはユネスコ無形文化遺産に登録されている八朔太鼓踊りなどの伝統芸能や行事があるが、これらを存続し、次世代へ継承していけるのは、学校の児童生徒や先生たちの力も大きいという。また、留学生たちは将来の関係人口や移住者になる可能性も高い。

情報化の進展により、オンラインでの学習や交流も可能となっており、教育における離島のハンデも低くなってきている。室之園教育長は「都会と同等の学習や他県との交流を遠隔で実施している。西アフリカの伝統打楽器・ジャンベが盛んな三島村では、ギニアの子どもたちとのオンライン交流もある。令和四年五月には、天皇皇后両陛下と三島竹島学園の児童生徒たちとのオンライン懇談も実現した」と話す。

現在の課題は、離島留学などを行なっている他地域との交流が希薄のため、情報共有ができず課題解決に時間がかかる点である。そこで、鹿児島県では令和六年八月に「山村留学推進協議会」を発足。各地が持つ悩みを共有、解消に資するよう取り組んでいくという。

「みんなでつなぎ、しなやかに、学び合う。ダイバーシティな島々を目指し、教育から島を活性化させていきたい」と、室之園教育長は講演を締めめた。

地域も子どもたちも元気になる島留学を

渡部真也（島根県知夫村教育長）

知夫村（ちぶりし島）は、ユネスコ世界ジオパークに認定された隠岐諸島の一つ。牛馬の放牧も盛んで、牧歌的な風景が広がる。人口五八二人（令和六年二月一日現在）、高齢化率約四六パーセントと、少子高齢化が課題となっている。村内には小中一貫校が一枚あり、現在、小学部二三人、中学部九人が在籍している。

この島で「六〇〇人の家族とくらす」をキャッチフレーズに島留学が始まったのは平成二九年度のこと。「私たちのヴィジョンは『愛し、愛され、人生を楽しめるひとをはぐくむ』』そして『島が元気になる』こと。留学生を迎えて今年度で八年目、合計二四人と少ないものの、彼らも地元の子どもたちも、地域の人たちも元気になるように工夫をしてきた」と、渡部真也教育長は語る。

知夫村の島留学には、「全体説明会（オンライン）」「テーマ別説明会（同）」「二泊三日の短期体験」「一次選考（オンライン）」「二次選考（現地）」の大きく五つのステップが設けられている。島側、親子側の双方が納得した上での留学となるよう、丁寧なプロセスを採用しているという。島留学が決定した児童生徒は、集会場を改修したシェアハウス「はぐくみ寮」で寮

生活を送ることとなる。なお、寮の運営を担うハウスマスターには、島外の人材を迎え入れている。

村では留学生と島の未来がともに広がっていくための指針として「変化を求めて集う場である」「知夫で未来が広がる、知夫で未来を広げる」「ぶるぶるだんだんらんらんらんを大切に（感動、感謝、楽しむ）」という三つの軸を設けている。この方針に則り、村で行なっている取り組みの一つが、留学生の願いを叶える「二〇〇の約束」である。これは、野菜の生産やジャム、ツリーハウスづくりなど、小さなことから大きなことまで、島を舞台に叶えたい夢を島の人々の知恵を借りながら実現していくものである。

また、留学生たちは花火大会の清掃やボランティア活動、伝統行事への参加など地域のイベントにも積極的に関わることで、地元の方々と密接な人間関係を構築している。これらの取り組みによって、



渡部真也島根県知夫村教育長。

子どもたちは一人ひとりが「求められる喜び」を感じ、島人は彼らの頑張りに感謝するという好循環が生まれている。

一方、さまざまな課題も生じている。例えば、島外に人材を求めているハウスマスターの安定的な確保が難しい。また、留学生に活躍の場が多く用意されている反面、活動が増えるのと彼らの負担になってしまいう可能性もある。そんな中、今年度の「中学生による少年の主張島根県大会（第五三回島根県少年弁論大会）」で、留学生の一人が「何もできない私を必要としてくれ、喜び支えてくれる人たちがいる。自分の存在そのものが認められて嬉しかった」と発表したという。渡部教育長は、「知夫村への島留学が自分自身を見つめ直すきっかけとなるように、今後もスタッフや役場、そして島の方々の協力を得ながら、より良いものにしていきたい」と話した。

島々を結び郷土愛を育む高校生サミット

田中晴樹（アイルンダー高校生サミット2024実行委員長）

板垣秋佳里／貴船梗（同実行委員）

久呂久千華 ジェイド（同サミット2023実行委員）

全国の離島に住む高校生などをオンラインでつなぎ、お互いの島の魅力や課題について意見交換を行ない、島を盛り上げるための合同プロジェクトを企画する「アイルンダー高校生サミット」（大正大学、公益財団法人日本離島センター共催。令和七年一月二六日に開催予定の同イベントの実行委員長を務める田中晴樹さん（大正大学四年）は、島根県立隠岐島前高校に離島留学をしていた過去を振り返り、「島での高校生活は非常に充実していた。ただ、島内の交流は年代を問わず盛んでも、島外の高校生と交流する機会は限られていた。そのため、この高校生サミットは、離島の高校生にとって非常に意義があると思う。今回は、参加者一〇〇人を目指したい」と、心意気を語った。

令和四年に試行的に始まった高校生サミットの参加者は、三五人（同四年度）、五一人（同五年度）と増加している。テーマに沿ってグループに分かれ、実行委員（大正大学生、離島の高校生で組織）のサポートを受けながら、互いに意見を出し合い、島を活性化させるための具体的な企画などを提案する内容で、前回は、島の日常生活あるあるやイベントなどを盛り込んだすぐろく、島外で暮らす島出身者に聞いた「離れて気づいた島の魅力」冊子づくりなどのアイデアが出たという。

今年度の高校生サミットのテーマは「白縁島縁」。各島の魅力や可能性を話し合い、課題の解決案を検討することで、高校生活の充実や郷土愛の醸成を図る。また、参加者同士がつながる「アイルンダー・コミュニティ」を創ることで、高校卒業後も島に対する愛着を忘れず、島に関わり続けられるよ

うにしていく狙いもあるそうだ。

「前回は、一緒にグループになった参加者と『大人になったらお互いの島を訪れよう』という話になった」と語るのは、昨年度の実行委員を務めた石垣島在住で通信制課程に在籍する

次呂久さん。また、今回の実行委員で、くちのえらぶじま口永良部島に住み通

信制高校に通う貴船さんは「前回のサミットに参加してとても楽しかったので、今年度は実行委員になった。離島の高校生同士をしっかりとつなげていきたい」と意気込みを見せた。同じく今回の実行委員を務める北海道奥尻高校へ島留学中の板垣さん（栃木県出身）は「島に来たばかりの頃はやることなく、時間を持て余して普段は考えないことに悩んだ時期もあった。でも時間があつたからこそ、地元にいた時には見えなかった社会問題に気づくこともできた。これからの社会を担う世代として、高校生同士で離島の問題に対する解決策などを考えていきたい」と、熱い思いを口にした。

「離島によっては同級生がいなかったり、若者が自分一人だけという環境の高校生もいる。離島という同じ#（ハッシュタグ）を持つ人と出会い、横のつながりをつくって、悩みや問題を共有することで、視野を広げる機会にしたい。離島に関わる多くの高校生に参加してもらえたら嬉しい」と、田中さんは高校生サミットへの参加を呼びかけた。

会場からは、「高校生サミットは非常に意義のある取り組み。大人が参加することができないのが残念」「前回サミットの成果物（すごろくや冊子など）の内容が面白いので、ぜひいろいろな方に公開してほしい」といった感想が寄せられた。



アイランダー高校生サミットの紹介風景。左から田中晴樹さん、次呂久千華ジェイドさん、貴船 梗さん、板垣秋佳里さん。

「離島留学」「通信制高校」について意見交換

各事例報告の後、「離島留学」や「島に住みながら通える通信制高校」の利点や課題などについて、登壇者によるフロアディスカッションが行なわれた。

離島留学では、「奥尻島での島留学は、スクーバダイビングの資格が取れ、町おこしワークショップに参加できる。島ならではの取り組みが魅力（板垣さん）」などのメリットが語られる一方、「私が高校生頃は、やりたいことをハウスマスターが支援してくれて、寮内では仲間を見つけやすかった。ただ、留学生の生活が寮の中だけで完結してしまうところもあり、地元の生徒と仲良くなるための交流の機会が増える嬉しかった（田中さん）」という意見もあった。

渡部教育長によると、知夫村では島留学生を受け入れるにあたり、プロジェクトチームを立ち上げて有志を募り、保護者・学校関係者・地域活性化に興味がある人が集まって、寮の運営などについて話し合ったという。「彼らが今でも留学生をサポートしてくれている。しかし、サポーター側にも課題があり、例えばハウスマスターなどの関係者が一人で悩みを抱えてしまうこともある。同じ立場の人々のコミュニケーションが必要」。

室之園教育長の「離島のみならず全国で里親が少なくなっ

ている。離島留学の仕組みや効果が一般の方に伝わりきれていない。現状を打破するためには、留学についての理解を深めることが重要である」との発言に対しては、「アイランダーやサミットなどの機会を利用して横のつながりを構築し、SNSなどで情報発信してはどうか（板垣さん）」や「ハウスマスターがSNSなどで仲間を募ることが効果的では（渡部教育長）」といった、情報発信の必要性についての意見が寄せられた。

通信制高校について、室之園教育長は「三島村のように高校が無い島でも、通信制に通えば高卒資格を得られる。人や自然と関われる島の環境に暮らしながら、高校生活を送れる通信制のメリットに期待を感じる」と述べると、実際に通信制に通っている次呂久さん、貴船さんからそれぞれ「働きながらでも勉強ができる」「島に住みながらでも十分に教育を受



講評をする谷川正芳広島県大崎上島町長。



約80人の参加者が登壇者の語る離島の教育の意義について耳を傾けた。

けることができる。時間が自由に使えて、やりたい時にやりたいことができる」といった通信制高校のメリットがあげられた。

◆
他方、「部活やイベントなどに参加できない／しづらい（次呂久さん）」「自発的に動かないと引きこもりになりやすい（貴船さん）」といった課題についても意見が出された。

しまづくりサミットは、谷川正芳広島県大崎上島町長の「離島留学について教育長と大学生、高校生たちが直に話し合う機会が得られたのは、非常に重要だ。都会のように情報が多すぎると選択に迷うこともあるが、自然豊かな離島では情報が限られる分、自分を掘り下げ見つめ直す時間を持てる。今回、高校生の発言を聞きながら、留学生だけでなく親御さん、地元の子どもたちも含めて、全員が安心できるように我々（行政）がサポートを続けることで、離島を第二の故郷と思う人材が育つと嬉しい」との講評をもって、盛会裏に幕を閉じた。

（Tokyo Islands プロジェクトリーダー）